平家物語 中

特別
へ12
4582
2

○清和天皇貞純親王

經基親王　滿仲

頼光　土佐祖

頼親　宇野祖

夫田判官代

頼信　頼義

義家　義親

- 為義
  - 義忠
    - 義重 新田祖 二男
      - 義清
    - 義國
      - 義康 足利祖 一男
        - 義兼 綱祖
  - 義朝
    - 義平
    - 義賢
      - 朝長
    - 義憲
      - 頼朝
        - 頼家 公曉
        - 實朝
      - 範頼
    - 頼賢
  - 頼仲
    - 義圓
  - 為宗
    - 僧都 安藝法橋 今ハ五郎仲
  - 為成
    - 弼ヲ ヒ若
  - 為朝
    - 義經
  - 為仲
    - 義仲
    - 義重

年十

行家
有朝
泰經
義廣
し若
亀若
藤若
天王

仲家
仲光

平治物語中

さぶらふ六波羅のかんだちせんぎ
あり〳〵信頼をめしとりかうのむ
こまをふりいたせどもとりたてまつれな
ほたてこてこたりたがひつゝそ
大庶ふこまりはて中将実国とりて
おかせどもとられぬ小貫氏りも考こ
とるけまい道信かたびら事うこぐ
ものしたゞしもんざうの貫居ゝく
思ものあるべきうひろのさいあゝ
羽蔵のはたまをしうべし官軍伐て

ゑさのくにけうとうまちふすま
いでんそれとれらとんどんとへうあく
ぐ長者と三百ごせばらるいあるべく
ばくありせちれらん清盛ものこまつ
あ養しくろいかるるさくのあるいふ
ゆくもいうぞらくるべきいそんやてうてき
とりろがりて逆鱗とやとあさいく
きんすとれとりべしいかりとそ出く
まけうあるきゆうあめぞおばしけう
うまとうるうせのいたとれのかるあ
おこぞまろ大内もしてふ人くい大将軍
右兵衛佐重盛三河守頼盛おうちう
のうまりりりさふいあたちくごれのうを
家貞右兵衛尉さうぐようう馬判官
りりふまるくさうのせうりう
ゆうるうこ右兵衛尉うけ尉と新藤
右兵衛家泰ゆんだの次郎つのとれあふ
ぐくつのあさせのとたの市うの尉と伊
ゆうもしやうけつふくそたるるれわ
と同十郎さのうげとうぐめてけうう
そのせいうてのうきふくとうとうあく
かもと川とうとうとうりめのうくう

ゑんくうちかぶ仏辛盛あらしぬ
きのひくこもこみてのみたひのまち
いよてうれまりのとうがふりのまつげく
うくせうらうびらちのふくれをく
ちをそこかくとくいふくちとけきく
アとふの矢ないまけどうれゆきりてき
つきげるりちるすり屋るきさうくと
すくうらういくくとをれりたなつり
重盛のくふひうりの年年辛治れ
アとふりうやこ年安嬉とれ辛歌な
れこそるさうぢりまちくこんでりいく

さにかくこん事ふふれうくびひうあこ
さくんくといちやうつるうがいさくれ
ふけらんやんくこそこふまきとこと
ふふけこんちすれみくゆくのれ
くくうう大ふぢとそへうて出屋りあい
ふいけゆうくうくんをくせくう
大角ふみるこみまきくちちるうと
けりびぢりその屋うあいいくんゆう
くうくんくをれうくうりせうあいくんを
うきりこうんくをくしきくくくあ
るどくす百辛をくうくそひわつびくり

はぐれかつがまぐさうはぐれかつち
まてしでしのせんごこうくうでんのも
さのつがまではくるの刻れてまを
うう三月ハいとれ三ろうれど源氏の
せいこそたてうはけう大文ありてう
平家のあうてうこそ平よりすれ大内よ
源氏ハ白てうかうるれうせふなび
こうそたてうれいつてるのどもいこあ
ア三ていてうう平家ハ三ていひ
もあへとたうはたてみこうきう
めてとれとうけうれうれうれた大
四月ハさうてうたびきしてで
いうまそゆーゆうたうれつる信乳
ぢとれのうをとこくうもてかをる
ゆうりてうさうふうたびあんう
いとつうられけうぐ元ざぬゆうてけう
三うくうんうこくうふるみうんうひき
ゆさうれうれどもふてうてうる大乃
ゆて二乃大うあいうきうこうるうれき
うりたうとくもみうえどぬれ元
三うれたうかうこうりうりうみう
してとれいはうこいそくこうはる

ら殺りて七八人ばかりてきるとさえぐさ
たるさんたちをもこそびぬ者ひとりぐしに
て入ぬべしぐるまうへ八まの者をるとく
屋とうばりてうあるさまをいとく
めりとてをもてあげてこれをこれを
やとりてうちうちうちうちのうしに
て屋をるいぶしさはぎごとをもち
まいきおとりてはしをまつ
ばかりをすかをもくくつきをう
くらふをあらたなるれとふを
をくぞたてられうたる義朝

ひとりとたのもしかりけるとそと
それをうあの信頼といふあくまじん
はくをうるうをて白拍子とうあで
ゆうをうもんをうをうをばのが
うりを殺うとくしのひとうをく
るるをうのをうしをいうをうむう
をうをうをうあのうあ者をとを見
えをうをうを武蔵守信頼を
大をうをりをみをくめを百騎をを
しをうをの殺人の大をを
うをうを信頼はとをうをうをうを

ア八相武天皇のゐんの大宰大武
清盛うちのうち右大臣佐ゑ盛さ
せこそいひけられけれ
一ぬせごうしうせうぶけうそれをもけうそ
いとゝそ色きのきつの大ゐうう
ぐんれをくるふせぐこうい二人りれ
しこわいそ色きうれをまけうと
いとちくと大ゐのもとの木ゐる
ぬせうせうせうり義朝ひすひ西海
ハいねぐんぐうらうきるなきうみぶ
うちといふ者うまんぐあひうゐぶ

うれけうそわあまおいあせとれ給
うれだうけそ西ぬうりんとそもとれ
ゐうけうくつてのうまぐ兵衛佐
兵衛けうさ源うとそぐれ二ゐ人みうう
のあ次郎ときうきうぶ長井の
さいうう右ハううきうのう原ちい先
まうのごゐ右ハうゐ次ゐ人ハ次ゐ色ゐ
右ゐのもやうこうううこの十郎あぶ
ちれ右ゐ先そうさのとけハ右せき次
郎うきぎうふいく大夫ゐ十せきうぐ
うとなうんのうんゐあのていく

西原ちかすさまひろうはしてのち大将軍
なりのぞうすれまきうんかうりのそ
清和天皇八清盛たる義朝のちの
ゑ一種金の西原ち義平といふの
あり十六の年ものしのふ大うれ
いくさの大ありて御文帝力の世ぐわう
義朝ゆうらうこれをうたれ
せんふ一どもかくれおとしたまう
新十九さいげんざしたまとそあるさ
ぐまんるうへくふりひびき
こうらうみるうへくさはいけ
ぞうてうとうけあれのひけうふ武
ごうふめれけそはこつちめたる軍
ちげりなりふめはけよちれ
りひのちいてうれ九ちうぐるの
さつきげのるふのりめうち大将
ぐんるとうるくんそはちもど
つあせうりのどもとも知ちまぎ
ちちとあせどうしけち
さふいどもちこち天皇ちちさう
とけどちして百きいうり中ふ

あるあくげんざとちゞめて十七き
のてしのさ大ねぶ軍重盛ハうりふゆ
うけてらもりんゝと大庭のもしてのま
とすゝふ立くさくさこんゆさうゝうこん
ゆうらでれとめりでう立めでうせめでう
ハまゝりとでよ十郎よゆうぶまで
くゆんゝうけゆまで十七きみを
らまこて五百よきうふゞとわゆりひあ
むたゝわりてゆさうゝ九郎佐
ちげりりゆうゝはゆそるゆいさゆ
ぜう殆のひゝうふ義仏寺家貞のう

て平将軍ゆゝうゝびたやうとあゝ
ゝあ殆ゆう君ゝるゝもゝふさゆる
かめらゝゝくゝいゝ一ゝびう家ゝくゝ五
さゝゞあ月ゝえゝんとゝわゆりひゝえゝさゝに
の五百ゝきゝゆゝゞらあゝてあ百ゝさゝと
あいゞゝて又大庭ゝゆゝ本のりま
ゞあせあゝせゝりゝ西源太ゝうけゝゆゝひ
ぜんゞゝう勝とゝん海りゆゝまゝひゝろう
ゆゝふゝいゞゝゝそゝうゝりゝゝゝ大お軍
いゝゝゝゞゝうゝゝゞゝゝ清きゝふゝゝりゝ仏と
ゝゝんゞゝあゝゝゝゝゝれ出ゆゝとゝあ

あくしんでゆきてどうふせこあく
りうとものどもとうやくとげどとこん
どは鞆の浦にはあがりくこ所さの
と大神伊右衛門のやとたづねて行き
ぶらり中ふねぐ浦ゆきとと
まれようひてさしあがりこうた
りうあがりたのてはあけ義平
ぐんぐのちやくすりはんを食い
家のちやくぶりうまんこうよう
きもいそぐきこうりうさうあ食
ムこりけりとそこうれのごく大庭乃

しくのまとうすにうあたりまぐそい
ぶりあく浦ちゆきに食う
やはをいれうん又ちよりて（さんとこむ
ぐ西浦ちこぐまでそてきとりんうか
うおいも ゆんぶえはいそるのいきと
ぶぐせりうんうりとりんうひとわう
鯖はとつふとりてあんぐふくよめく
きいこぐこぐまでてきぶりんうう四
いうくめあまこすくやうふをい出せて
ゑあぶりうんうつふこせさんぐぶう
ぶいうけ毎りはとうつるこのくもひ

[illegible]て十七きたるゆゑ
てんりゅうじいづるてきたるのあるそで
こゝろとゝまるせどきうんぐにけられぬ
まこゝたるゝゆとくづれうるつまとものゝ
たゞいたるそもさゝれたりとゝろ
ゝひとゝまるぐゝもあくゆたいなく
かけたるゆゝふあるひけゝうくゝそ
かゝしけゝたゝ作たけりゝとゝ
たゝ巻ゝうたゝ自後こゝぎたゞ
のゝゆもけゝとゝかまゝこゝまゝとものゝ
ゝとらまゝゝしゝゝくゝんぐゝ鐘を

うちゝゝこゝにゆつゝは童蔵ゝとゝそ
まゝうゝくゝゝゝをゝゝまけを
あゝたゝびゝゝすゝゝゝゝゝぶゝいゝく
ゝゝくゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぐんぐゝかゝぐゝをゝゝすゝゝゝゝゝゝゝ
づゝゝゝゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なりてそびえたつこの方丈はげにひく
もりごいたれだいもしけの神ふは
こしなりてたちもたどりぐひとも
ゆるぎなく無法者はまさひろの年
寄のさぶきこゑもうかうかいまも
いごさんのれとそばくしまよといそ
おちんとこころとつてくわつ下知をう
きたりいよひいて知らぬまどいはるる
ゆゑだ法師はけくるる
なれど重盛さいりくのこうそをおとも
さまたふくもなりて大きつふるり給
ゆゑく法たのしまよぶいりくふこまれて
しくさはひろれおのぶ法門とはを
こしなりあひこげりもりふりあひく
もんとまたれいまこれけりちつそふ
ふいとわりまきこんきれとをみ
て強田ぶかりたちとろとろれ
毎すいり知りしとろふのびひさ
しをうきてとしひどくゆひむ
ちのされてちうちうひざいりく
今へかぐこれうこ盛法ことて
ゆくぶんこれうこ方丈中ふ

[illegible]
[illegible]年[illegible]人虎と
[illegible]紙[illegible]
[illegible]
[illegible]

ぐうとうせられうじとおりひ彰有
有兼よりありひこうふさうてうび
をとたちをとよびけやをぐるふ
うちみうを殺みの坊のびらう三人
ひさふいうを重藏をたをかうぐさ
し強田を兼たなくあくげんぐし
あううをぐ見てくられうを十二月
廿七日をの剣ひすなうふ一河西さ
とをくはをげし見をぐ吹ろをのぐ
こりてだうとうしびかはうぐを
られまりをふたらかあそのりかれれ
西源太をひすひてあうをつきて
のをてのくまりひきをだふくと
きびを見つけを濃うちうけのりて者
ア辛治ひうをせんをうをてうれてが
うをありとうやをうを殺みをのを
彰國ゆうをうんをひりんひうる
軍ハうを名ひをやをうんとのの人
ハひを大將軍ハ清和天皇ハ後嵐
ハ後ハ大將軍ハ清和天皇ハ後嵐
右馬ハ義朝のりをぞふれらをけう
義朝のりひうをハ西源ちをこをぞま
ぐてをハ出とぞかーあをものぐ

とをとりやとりのすへ大夫を先陣に
新宮十郎義盛四郎信俊三つさぶ
の大夫とはせめとりてとりもしくとも
すこしも太刀佩はせ給ひ年十
三とのたりて歌こそきいたりしかふ
てはりせくらふたまはりけるを
くれのうしろにひてなりふりい
まはしはまとりもの義経のうしろ
ひらりとのりいくさのりのれて
さきをしらはまはらふみゆうそう
ともひけてをんをとてまさきあた
めひてうけらまとられたつてのとも
うらうどでたういうち彼盛三つ
負たうひりんうりのうちもとれ
で義経つひてきうりあい
けりてくふおくしてたうりへ
もきられ源氏はるをうまうく
きくいうりはうすこうり平家
馬のいきとやとりくうけまて源氏
大将へもきれ源氏るのいきを
けるでくめうれば平家ちうも
けうとりのれたるのふいのうれ

まうでいまうこしくぶけいのみちをぞ
ゆきすぎうらの西原をはるかにながめ
義幸はさらにはるばるまうでくだり
ゆきすぎ名取うらづたひてぞさしもとけ
てぞたちうひろう鎧田ゐ下人ゐ八町
次郎といふものあり はるばるまうでふこ
ゆきそくそもさうはるふさき
ごちうう島義とん八町ごうちに
あはいはあうこんをれゐ八町次郎を
どうやうちうるふくくそんぶり
けうのあれども中くうちぶらよ

りうべーうるあせよとそまうに
ふゆゆそくとせさそうづさ
つみうとのうはあるる
すうをはうしぶたうみう
ゐれゆふのてゐんをうとう
ちりけくくうつまうれこうを
よもおくあとりうさぶはあひうら
れうをいあうどいうけうづとかり
だそうりや八町次郎まうれ
といひうれどうのびあうりかぶで
のてゐんようそをうちはおる

と云く参りねとてみもさゆきさ
きあるうちをがめけれ
とりて去てうつくしうれいらまで
のちとありしこまやくりを
きてけてきうくあでこさまそ
八町次郎をのつ宮にちびてこ
ちびくりそきちびうる京とべ
ごとれたそあくれたかやこあれ
もりきうのひうい町次郎も
ちりもいうりそうけうふで
にうもでときうつけすぐうりそも
ちそどたてもひらどこうまとむぐ
ちたうくはうぐあそうとひぐ
きこくうまでかくめしてゆうち
くれはゆうゆうみうみうられうる
ぢうとあけれゆゆ吉彦ア
宝蔵いけねあそ彦ア移をせられ
けうふぢうり大蛇あぐりてこぐり
とれまんとはぢうちうとまうぐる
くそうきくうくすうとわを
ぢくこぐあうくうれだおかふとそ
きくぢいけるきうむみありての

ゆんとしたれいまちのあけて大殿の
とびとさらてさやるはさまりぬべで
りうこれとみのひくけてそそね
けまりとふけらまきれこのね
とかけさしもふやぐさぐいれのい
大殿の小殿の御方とけはふ
弟四郎殿後三条右四方の御殿
とこぐめてまれてくとたまふ
ゆりさうひりりに弟四郎殿
あるぐ
ありのみくいさふむしひれ
ぐ夫もけもいればかりとも
うこぐりりの方を有まぐでいかりひく
うこびるみくなる殿はきて殿の
なりにあひりいくさりはし
みそぐありけりむまをいさせて
ふ小殿のみげいりりりまる弟四
大師いりきぐはりあはふどたう
ぐりのありさんぐるうひてきあ
まるいしもきれちりるい
りりふりれはないてどいあ
いきてるふうりりぐふせんと
あさんぐみたくりりぐふちこれ

とみく家信あいみ
いさすぶかりしち
ねもけらぐるとは
のらこれんくみち
けぐてきとひさう
がくさふらう無
たつ[illegible]ぬるみもう
もたくえやうぎんよ
ものぎひとしひ
はらうとみくまし
れらぎやうせんきう

これふたうひさう
とうすて小ぬく
さふくせたうふ
今ものてうくと
むだいうつうて
せふけう毋有別
まの基京京の
みてきニ殘いそ
きのむやうけめ
そくあきの國ひ
とのみくとうと

とりてびとりてきるふうちみちこ
きたるみてほねどのといいぐさるひと
いとーきのもーやーしけむしひきき
ふたそそとつかさねされ四ろうん
大木戸八郎とゆのこれしらびの
ろいそはしらびひとくくこれが
いふ長井れかうれとよのげざんへ
ゑおすつゑさうとしいけさうれ
ゑはしかしるるふるしらびは
けくなふうせとそそやって二条
ろうりへせきこうこ二ろうむとざい
りれふけとはいちのりれの
いくされげ物ちろにはしらびう
ゑつゑ潜りふろのんとき
ろうとこんあうんでそそせ
出ぬうせてかるまりとて月光寺
はまでゆうひくまりおうろ伝
彩つはけさうゑつまくのちい
ゑさすうまでんはりひしうしびあて
きゆあいはちざやゆちみち
のこざうのられうこれとゆよ
せどーてゆ潜ゑ千ようきうとと

のがりふゆちられるまに金をぬた
豊春屋こそゆちらまとうせいよし
ときをこそとたてゆとせわのまをれどのぬ
のくもどあまをこ伊くいさをせをまを
どをそをこをくをせをれをちををを
あいあをそうれをちをとこがちをせうぐを
ふをちをくをまりをこをちをよ義朋ををよ
せをれををこをつをとけをくをられをまを清盛
ををれのをこをよゆどをあきをてをものがをせ
られをちをがりのどををとをけてけををあを
きをあをこをまをれをけをふどををけをあを

ふいをこをせばゆくしてやりをもし
をゆはまをちをれふをまをこれをよをを
らをせのをつをそをきのをこをもしをつを実氏
をうをちをよををいをせんどをををを自を
ばをそをどをををふををけをちをふをきをちをど
ををそのをのをひをけを赤馬伊予守盛
をあををのをなをま伊予守盛をて
られをまををて三百騎をそをちをけて
をうをせどをまをちををこのをを新田
三百きをかをて三つを伊予ふをを
伊予をかをまどをををををのをひをけれを

あまをふをんなどもとりまきふさんふ
ひ頼政ぐんりまりひろいさ一てさ
せんとてあすとうきめてをこうちれ
ぬんで兵庫の頭頼政ぐんぜ源氏ぐぞ一りん
をれいみくさあさりのうぐ平家がぐ
いをとうとうぐくせをふこうとりんぐ
しとりひいくさうとまりとうろ
ぬもぐとう源氏のうをひこんをうさ
りのとうあへやうちんとてまん中へ
をうて入うんぐよりけうれうまとば
りうをぐれ一つ六宮のうの人一百きこ子

きふくありんといひうれ西源方
にうけくそうれてうりてうりんをの
一人りの形 頼政郎 郎ぬ下綱の四ぬうち
人下の郎 花ぬうぐ郎ゆきうぐをりり
矢をあくぐんぐのうをうきうぐ
の四の侍人へやまぐぐとうぐ源ぬうう
ぬうぐうびのうの〇いきやくもうをう
ぬうんとぬうれいぬ文郎の西これをと
て矢一ふあくうてうをうりのを
あうふくをりりといきあうれゆんう
ぬいそのうをゆう西源方ぬくまひ者

ふかい淵は矢ぐりあるうけるぞてさ
ふらびぐてそて十するみてとれとも
こもり（に新井別か尚こちとぬいそちを
あひこちゆぎこちはをんみてと
見ろかをぐことう三盛いひろそてを
ちびてそてするみてとれとあく
げてこのゆかせるりといぐさてんわ
ちてそてちびとのてくぞうをちろ
ゆこちれるひれあてれみやう
きまかれ宜しく相別山西てそみ
をこのつちとちちちぐやうぐのぐう
ちまとちんていのちとてていさと
ふの淵とまるあてせてありいの海か
いきてをるみてきんうちぐふきんと
あたうひちしい西海をあてて武ん
那ちうちひふりのれぐやぐうてと
れとの合（に作ふりのるふをぐつてて
うけを那ぐるみぐとちふをきか
ちとうをこ十郎忠に指えの合義を
ある朔のぐんみうひ入る馬三郎さちう
ぐいとうれくてちとりふをまれや
ひきとのぐまてを久伝あげあちぐ平

始めてきこえけてうひろう矢
ぐ稱しいそしゆきものひきゆてを
あぬたらしうちわりぬきぐらつる
ア長ひつさげてあくれみくうれ
こうちとこうんとなりふとこちるゆれど
きろふのぢうへ足立ちたるとに
こいいできこうる足とけうんあぐち
廣大方とうちゆくくうのくちやし
こびくといひろれだうのたちるは
どしけるものこうとこちぐ魔こうん
つそけうさとうこうもろる郎ふのち

ひとれてう稱こにとたよこち
しびくてこあちくうそぐうあぐ
ち郎ふけうふむこちのもとを
ものこうふこまぐきうの
とけひのつこうかいるされゆ
てあちとふめこしけはもてし
るふうせんこそこうとうみくち
けうあぐちいひろこちるもし
こるいんべき事ありとそこもぞ
ぬ歌一強ぞきこうろうはれ
るみこどてきみてくんみきどこう

ゑいてのやうどいたるうちかぜふ
こりるうち地ちくれいたちあひて
きぐうちとうてゑもきうゑ郎あま
くをうべくいひろうふあやうみる
ちんみぐかくくそうつまとたかか
くてうてをさきそめけうをろう
天國みちよりんこさんとて二人の將
軍あうき幸れいこ人のうんとうち
うう條若ぐうふこいたれれうて
ちまとうをせばつうんうにたひどお
こふうきうくうれ幸れとをうふ

ぐうくとう條若ぐうとうにううてい
うあとこいたれい條若ぐあうれ
ふたかうれあうそのうんようくべ
とうべども宣命にまうべ他國を
たびとをせめふもうりかあうんと
きわうしんぐうとうをあうこぐ称
ひふたびとをはうぐううう河
又條若ぐうとうていうまうそて
とひうれいれんふたなくいぐむな
ゆううてみをせうあうぬうこうふ
うういぐうとうまいあまこ

うちとけてものをいふこそ
いまはいとうとましけれ
なれそめしはじめのこと
をもしたりけるに
ぞこはりうの美風
を敵とおもひて
けるふけんとかけて
しきりの風人行人
うとましみつつふいてくる
なかをかまにとりて
うやけりしかぶ
たまひけるふうとんで
ての風いつぐるうちに
すりやりのれそ
とおもふげはいて
ひとうあけて
ぬきひろ
ぬきとそか
ぬきとて
ぬきとて
ぬきとて

らあるべしとそのとき源氏
のくものひろうかうひくまもなくも
ぬけまいてそこにはまれまで敵をうちぬ
ものらの源氏さうかうんとそかうん
の元をこれうちぬけいはぐれまわ
ひかさてまつのやまをはきうちぬけ
ぐの矢ぬひあうぐめうれうそを
ろるようろうろうとせそのうの源うう
いづまう源氏の大将軍でかうやはた
軍大武源氏はんとぞせんとぞまま
むろう西海をうりこれるよる

とそおりひそうのけうふ平家のさ
あいそぐいはうんぐのふかうそ
いまぐんぐのうあいぐいは平家の
ろうふかういまたびひあわ
ひくまあたうふかぐふかうの源氏の
いたけさうけうきもも平家の
せいかいはのあてうう西源氏の
いすうよううそ月うんうれむうの
いうはけぐせようそ門うかうん
きうを門うあんをれうう
うそものうもうひうう義平ぐ川

ちとせのこゑきけば千年の齢の
うさんと思ひやるぞ義経のいとけな
ごとくにきこゆるぞふせんとてもけまし
ハ猫田ハけつハ源平うち矢とりて
いつまでせきもりとりてせどもどん
じとかこれ人をけきまふるつ
こゝにてうちもさかすひてまろびとて
きのむしの蹄よりけさはらんすれ
ちちはくくいろまとしはちさせなま
むえいろあとふとりて敵ふりのと
はけすこせまるとはらしとものさま
むろろハ東へゆくあさうちのせ
きあ〳〵はりむろハ源平の石とわ
ゐべさたぐさてみてうちまぶせんと
てうけられもどし猫田はしもの
ほふろつきろとちくみてつて
りのあまあ屋ぶつとそうけさせさ
ゐまつ初ちとよびてうて
ちちはけぶふはちられうち平家と
いけくせあそれいこ東うくみて
うまいひろろいとのハはぶ
めひむしありて義させまるぶ上せ

ごぜいうゑもんとひられい平賀冠者
義宣をきうをもつてさんぐふたうひ
くれい義勢ありあひあうんぐんぜいもち
ひいまでをはたうるりの山をさは
うれあつて義光平賀うさすふりれ
きとみてくまもんの作木源と伊藤野
井源冠者とをてめてをれてくと
中ふをぐこうまをうひうり作木源
こ秀義ハてきこ二騎いそを負をれ
あつをとりてはちかをりをもうを
郡戸後迫ハこの東ハ原にて三をく

とうをせうちまをるをんと思うくれ
たいのちハうざりれはるれハあや家
ゆて敵こきうてうちをぶふと井源
冠郎のぶうけハ井冠ハうを矢とも
てけさの矢あうををうをて井冠
十八騎いはをちをびぐふやハのこう
うりくうるこの東ハ原ゆてきハ
きいはをう服をう矢二いのこてをれ
なうこゆをてうをうをのをうをれう
はちつをきをぐとをまをうをとゆを
うちきりつえゆつをこをぐハゆうい

八幡殿へ参りてふたたび
ひまゝ義朝公清盛卿
あづけ給ふ事もとめいづくまでも
海へ入るべきの由申さまい
らせてはとゝまりけれ共
ゆるさざりければ
さくらまと宮へ
六條堀川の
みまいにまゐらせられ
まゐりぢやうにてゆ
けば
あそばされけるゆゑ
たゞそのたまふ
いくさいでまゐ
ちまけてゆ
まひろうそきふ
明のむとあ
ちとゆ
もいもしきも
うけまゐ
ゆ
とも

どもとんかのかすをすひ
あつかうれをまきとうじてちかせ
むのをとまよへうしのくまんかう
のれしかうこそはりせつまてやせ
ぶそへとそのさんをうまれはさりて
はるむしひをちはあるをはへ
ぶつとやきれそしれだはたいうが
いそさんらんとそれむまれ給
ひうこのうを養君みていうさき
そうそはいうせうれだいそうあれ
ふううぶきうふのうそうはりへ

すてるみぐとうぐうれは紀あえ
うれはやちはくらんうくれ
うまんだるみぐとくうふるとね
いそこうふうれんびとうてむ
くうとばよくぬさあはんびをそて
せういうかうのねひのげぐんふいを
れひうをぐいうを食ドをれは白くわ
なぐとをれてんてぐうをふいうは
むるきすすうをんをものを
きをそるみぐとるぐはひはをむ
ぐんのうをうふをうる信のあう

それをとりいれんとて
ありてはちられんとて
けのごとしやう信乗義朝の三男
三郎とぞ申しけるとりの
爪ふとくとがりて
ちりひろうしりんの
あ山ちの門をしまもるみ
ろいさふかしやうの
をもしろしてあしのそばりとを
ふろういかるしうあり
あ東ふへはちゆくしたれ
ハ三郎ともやとのうちとりこめ
ありてそうちひの神とぞぬりける
この剣よりもうさ同月
とりのちふやしれにより西塔法師
ひりとそ信乗義朝はたらかり
いぶやとうんとして一二三百人ぞ
かけるもちけうり義朝はう
をきたらひ大内方はせて
ちふせんといひつとかりぐよ
三郎さりはて
山法師のちふ

こまんきうちゆうとれて
のくさ〳〵ゆかの前面戸けつかしてと
三盛ゞけつくとめてとゆかさいく
せんとてゐるうりゆうぶとあい
てゐにさげちゝげさらていひあ
ふいたゐ馬番の方ゆかの人ふたり四
こうこふくうちぶこすひめこれ
八位四のうちしやどもみくこゞを
かつてゐんどきうてゐんこうふを
ちりくうてそもあみくしのつぶよ
物の色とさいく世たくいこうけてと

をしのまとひとひとれいたゐ軍としてし
あうりけうこしやどこめそうふ
せんゐ物具とこゞそこもをたとを
てとゝせこいひこうれこ同ふりけとも
とこそこいこうものゞとさいせよと
いひこれ三盛ゞこうろいこ四ここ
をいゆそゆうこうれいこゞせいな
アこりのくこと一あたゐみこそばゞ
とゐゞえこゞこいかゞこうひいあ
いこるけくこいこうれこうあこゞぬ
しゆうまうこいけくゆまうこせよ

ゆいしょをいとなみてうづまさ
ものげまいそをたらき男ふ
あくるめかのぶくらびそれのうち大
三石どもとれさきふとんとめぐ
はまくくこれてつとらぐう老僧な
それのあれらぐせきるめらうきう
三ぐいるるるくせよくとあい
てさいきみをうとしろよきこて
うしかるぶけあらしてそそゆう
くうたる三石どもあるまいふとうしは
石くといひそれ新羽別当あんせ

らふくくたのくびひをさ
石義勝郎おにむさしれふふ
の信人長井の新羽別当義盛といふ
ものありこめんとはけめよ
とそなりひさうきまきされ
いとぐんといふの一人あかて
さとはりうう義勝のさひあ
ふい信教いとふはちあまはけう
ものびらはんいげらあうん
とのくまおこうふとうれあうぞ
さぐられうの八郎のまつとあて義勝

みとひつきうつ(つ)ゝ屋ゝうゝふゝ
ゝゝれゝゝゝゝふゝものやらんとまゐと
ゝうみ信頼とゝつゝゝてゝゝいゝゝゝ
まけゝゝ京國へ(ゝ)ゝゝゝんときゝ信頼
とゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

きよらんとうくとそはやとしてさ
つゆ又横門ぐりし二三百人信軍義
朔をうつあうそうぐめんとそあうけご
ろうさうりぐさうをもさういぐそさうら
へまちうけうりホうきしうしうおう
あとそ逆ホとおりのれきびとうを
ぎそとばらんとと横門ぐりし
さんぐくよいうしいおうみくの古名
うたうれうびのひ○よ夫一うりる
うりはうしれうう又夫一中文進朔
長のゆんでれそうくよまうくかふう義

朔長ひのひ朔長ハやふあううれ
とのうさんいやとをうさうふぐりくふ
けとそみうみのうの古師ぐうそ夫
みあううむうりはうれう
義朔長ハやあうりうどとそす
うりをはうすうあきうおうせどき
きとうけてぐすきしううようそ
ハ義るハうびうせのうまひうろふ
ゆきとうハうすひいうさうにまけて
をうういはうの申ぐか　傷法ハて
ふそよいうさうとてうふうせんふひ

屋にいらふ人をもりとがくびを
てれよりはやりひさりてきんくふを
ひとれいよりかりしせよりうう
れうりのうみうるとうい伝教
和とぐうまこうとうとしもも
るぞけふとりしのてぐそあやい
ぬるぐうとそぐうろうそふくく
ぐうりうろ龍下れみてみて後ね
無常ひとりとりてんぢみなづを
主もりいびくうまぐとのうとて
りうろりはんふるうきうみりと

きてうこ別のけ事りとりあんぢ
ちれりりみやうろうぬとそぐそを
きうりとりしぐはをこりうせうて
のくまこいびくりそれけりつる
けりてりとりもるうせたりんぐで
ふけりりきぬとりんまいせそうか
屋りのりりんりりうせぐりそんとろ
しりりりくくりのくまこいちく
りとりびそれりりやうろうもり
天りりきりそりりうふこのの
びりくそぐそりいせろりぐふ源

民の代ふるとて一条の二位殿
保つかきこのうちに侍従殿
弟さうの御とも世をいそげけるとぞう
けこゆうさうれども信軍は美濃
ゆとてらまとめ八郎の松ていこう
ものさうあるしそれだにいとまも
よきありけるぶ所の人なほとう
こうくねるとぞふやあ人のゆく
すもとまうこんれば御とそこと
れはらふそうあのとまきこの大まハう
つきこうろうぶ信軍はけうれ
あるみ地とうきてのちに合戦しまる
まうの御うまてのそうそうそうらま
うれい馬ありいぐまさ地ありふふ
りてかりいあるいてしめうそま
つまでむのあさうそめさうそうう
又馬ようきのきこそさういてこと
ゆきば仁和寺へとう宮さうに仁和
ちんとうりぐる蓮華野へ出ぬ
ぐうに法師のうちゆうと弟まに
宿あつまりてきうくきそううとこ
うんゆきあひうに法師これを

[illegible]たぐいの物を成されいで来
うの義人みてであらんいぶかの物
のぐさぎてうとそまんすうう
ちうこあうあれとうあるを大まえ屬
殿方を取れなうちまふしのひね
ちまい國しのうもしやれてんうは
ぢとううこびさいとりんとそやう
ゆさうものをとさいせうこいのう
をかうとけのうをうこい物をと
さいせうというちまうひをうれ
るうたるうとせうれ失ぐやう志

ふぐのうれうそれうこにた
和寺人さいうとうたのこさいうせ
てをうりてうとさ海ぐくあやへうれ
いうとうれ不俊みあうぐやうこうい
かうこうかうせのひうやうぐ
て伝彩をいうとけうせのうあく
やいうんうこうこ清書をいうせた
まんぐうれ名事をうせうこ海し
ぐをうこうてあうたのこさいうこう
のてをうこうけうせのうこ清書を
しうれ名をうのうこ清書を

ちくとくよりせうまいばとそでふこの
身軽國清澄寺のりりりとたれかて
こゝろのまゝに仁和寺の御所に伝教と
ちごのそこそこのこゝろのこゝろまいて
まこゝろむかしのこゝろ五十よ人めに
見てそでいそぎまこゝろ遠中ね成ちゝ
祖師ふみしきの修ぶどうもこゝまの
こゝろまとつけく六條殿のもしゆれよ
ふまもつすこゝろ右兵衛重國ぶは
見給ひのちのあのこゝろをばぶを
りりふせびこゝろしこゝまこゝまきよ

をもとこゝかうしも法けんのこゝひぞ
とのの清ハ方國ゆきもしひこゝりゝ
てこゝぶこゝるこゝとひそぞゆうこゝれけゝ
りりのあのこゝんぶれ地ん以の代
みゝりけこゝれかいすべきこゝる代あ
まこゝそぞこゝるぶひ法ふ伝教はけよ
しきこゝ伝教こゝもしたこゝけまこゝと
やこゝれけまこゝ聖あまこゝれぶのゝ
ゆこゝぶこゝとけ地りこゝりこゝ
こゝみこゝるこゝぶきゆこゝふ屋こゝやこゝら
むこゝやこゝれこゝまこゝ清國のこゝまひあ

ふかうんどれむりの大わ軍ありし
君もいのちをいうぞうわさうてめい
ゆうとくべきこうしくこうれとぞのく
よしひろうちうとよしべ信長はた
象ううふひさしくうてをせうわ
ちひさうとうきけうようで信
れとかりうとけわぬ尾ちんとゆきわ
ゆうぬうげきうぬ（ハ）わ尾たの市ちを
ううこうりてゆそのあうりうぐうちうのわ
てどもをぬし移ふとけうくうきうび
めぞうそんうう右紹ちを右紹ちあり

ふゆちんとかうふうりタ小ちうとのうう
とはうやうのまりとやり（ぎこうしと
こうぐめてこうえうとのかいむりんのうとかぐ
れうちゆうにうりうにようひ
ちゆうりうりうう入うのようぐうちうび
けううろうぐもうりあうのうぐうこうれうねば
はいうく信長のうぐうひのうこ（ゆうう
ぬこの中ちのうこうとうゆうひうやう
とうりうう移んぐうりうとうりうん
すうりのうとんううこうりうきうかうそ
うをつえうとうりうなう信長のうぐう

とさんくようちうきこうしうきこうしうきこうし

なんぞ清涼殿にこのうれ清涼殿にあるこ
信濃の守義仲が子伊与國と
いふものくいよのくにとぞ申けり冬
の寺に武蔵坊弁慶の國と名をつけたり
のことぞ申けり清盛の弟
伊勢守ふぞ申けるよく覆い
家のこいうちとぞ申けるとられけり
かくよう納言入道信西のまご十六
人これをいとうしたり信西乃
どもぞいあるあり殺されたりけるを
なほふるさとに来ぬとぞ人々

それあり人信範信西が中に
あるとてむかしの信範めり
しぬそれいうさまのげんをいとに
いきどほりをぼしたりひ今夜
ふりかかるとあらんずるにそれ
ぞれ十二人ぞ人すてふ部を
ふりそのくさいくまふさてふ
さけの人なすれらうどう二宿と
をくよりまで家とよ月ぬと
つ下人ぞと使うりてあるいふ
ごりと情をうち東國へ下りぬと

相坂の関の明神と神とて
山をぎたくふりの雨とぞすぐあらら
雨間(あまま)にてうらん(ら)ひ(ら)ぬ(ぬ)ひ(ひ)ぬ(ぬ)ひ(ひ)ぬ(ぬ)ひ(ひ

しら野の沖つ波の中に見すひ
ちぶ川のもとにしら野の田
しろの面に面ふつきすゝめ
ありとをすひて
いつしかふりけりと申やや
しろの面にまきしなえ
山おろしはあらふぶふこゑ
あふさごろて柳とあるとも
ひるれとも面いまはなるもむかしも
りいふしつれるもなりひいづ
ふるまのいろれはるけき

なごりにとゝめ侍く辛治元二年
ありのままに写す

辛治物語中終

7